

財団法人 黛民族舞踊文化財団



舞 踊 文 化
E. T. C

N O . 20

目 次

歌舞伎と人形浄瑠璃 その相互交流	学習院大学名誉教授	諏訪 春雄	2
------------------	-----------	-------	---

アジアの舞踊、おりふしの想い ～韓国・国学院&ソウル大学校～	日本大学教授	丸茂 美恵子	4
-----------------------------------	--------	--------	---

舞踊作品における物語の共通構造	比較舞踊学会副会長	国枝 たか子	7
-----------------	-----------	--------	---

自然人アイヌ こころの歌と踊り 第18回 「セトナとマニベの物語」	アイヌ文化伝承者	四宅 豊次郎	9
--------------------------------------	----------	--------	---

平成23年度黨民族舞踊文化財団活動予定			11
---------------------	--	--	----

歌舞伎と人形浄瑠璃 その相互交流

学習院大学名誉教授 諏訪 春雄

一七世紀の始めに京都で歌舞伎は始まった。人形浄瑠璃（のちの文楽）もそれから数年遅れて、京都、江戸、金沢などの大都市で誕生した。

歌舞伎は、少年主体の若衆歌舞伎、女性中心の女歌舞伎の二種が、それぞれ江戸、京を本拠に発展し荒事中心の江戸歌舞伎、和事中心の上方歌舞伎としてのちにうけつがれた。

他方、人形浄瑠璃は、それまで別々に誕生発達していた、人形、三味線、浄瑠璃（初期の語物の女主人公の名による）の三種が、一緒になって誕生し、はじめは素朴な一人遣いであったが、一八世紀の始めごろに、三人遣いに発展した。



京の四条河原の遊女歌舞伎

歌舞伎は、役者が舞台上に自己の肉体で自己主張する行為、つまりは役者の芸つくしである。

対する人形浄瑠璃は、浄瑠璃の語り手の太夫が、人形と三味線の助けをかりて、背後の作者の思想と世界観を説きあかす芸能である。したがって、歌舞伎役者の演技が身体の動きをたいせつにしたのに対し、人形浄瑠璃は思想と精神にこだわった。

発生時からこのような本質を内包して出発した二つの演劇は、そのうち、たがいの性格をあゆみよらせていった。両者の交流の第一期は十八世紀半ばまでの時代であり、第二期は十八世紀後半以降の義太夫狂言の形成時代である。

第一期の相互交流の時代、歌舞伎は人形浄瑠璃から主として脚本を借りて、芝居の内容を整備して多幕劇をつくりあげ、他方、人形浄瑠璃は歌舞伎から役者の動きを取りいれ、人形の動きの改良につとめていた時代であった。



初代市川団十郎の天神の荒事

幾度かの手痛い禁令を経験した歌舞伎は、一七世紀の後半にいわゆる狂言尽くしの時代をむかえ、演劇性の開発をせまられることになった。このときに歌舞伎が手本にあおいたのが、能、狂言、幸若舞、人形浄瑠璃などの先行、並行の芸能であった。とくに、歌舞伎の脚本の源となったのが「浄瑠璃物語」以来の高度な物語の伝統をもっていた人形浄瑠璃であった。他方、人形浄瑠璃が歌舞伎から取り入れたものは役者の動きであった。一八世紀に、二人遣いなどを経て、世界でも珍しい三人遣いの操法を完成させ、歌舞伎をしのぐ人気を得て『菅原伝授手習鑑』、『義経千本桜』、『仮名手本忠臣蔵』などの現在までも上演をくりかえしている名作が生まれた。



大分県古要の一人遣い傀儡人形

人形浄瑠璃で評判をとった作品をすぐに歌舞伎にとりいれ、三味線を伴奏音楽とし、太夫の語る浄瑠璃にあわせて人形の代りに役者が演技する形式が義太夫狂言である。このような形で人形浄瑠璃の名作は歌舞伎化され、歌舞伎は幕末、近代と名作者、名優があらわれ、発展をとげた。

一八世紀の後半に、大坂にあって人形浄瑠璃をささえてきた竹本、豊竹の二座があいついでつぶれ、人形浄瑠璃は、新作を生むことができず、古典化の時代むかえる。

一九世紀の初頭、淡路出身の興行師植村文楽軒が大坂に出て人形浄瑠璃の興行をはじめた。この文楽軒の芝居（明治にはいって文楽座とよばれた）は人形浄瑠璃の代名詞となったが、明治四二年（一九〇九）に松竹の手にわたり、戦後、国の保護化にはいった。



珍しい二人遣いの山梨県天津司舞の人形

アジアの舞踊、おりふしの想い ～韓国・国楽院&ソウル大学校～

日本大学教授 丸茂 美恵子

私の海外渡航の経験は遅い年齢であった。その初めが既にお話したが、1998年9月の韓国ソウルで開催された国立国楽院主催東洋音楽国際会議に招聘を受けてのことである。

以来、ソウルへは10回を越えて訪問や招聘を受け、また主な伝統舞踊家や音楽学研究者を日本へお招きして今日に至っている。ことに国楽院は私の訪韓直後の9月末、当時の金大中大統領が国賓として日本を訪問された際に三宅坂・国立劇場で記念公演を行ったほどの韓国の伝統音楽・舞踊の国家機関である。今回は国楽院とその国際会議で一緒だったソウル大学校の李愛珠教授について、各々の国際会議を通しての思い出を綴ってみよう。



第3回東洋音楽国際会議における筆者の発表

東洋舞踊の舞踊精神と近代伝統舞踊の父・韓成俊—国楽院主催東洋音楽国際会議

[1998年9月2-3日、於:国楽院牛耳堂]

第3回東洋音楽国際会議のテーマは「東洋舞踊の舞踊精神」であった。かつて国楽院がヨーロッパ公演をした時の記者会見で「動かないのにどうしてそれが舞踊なのか」という質問を受けたのが動機で、東洋の舞踊はその自然な身体の動きや静止した中に精神的な拠り所を求めるということを確認するために本テーマが設定されたい。私はもちろん、「日本舞踊の舞踊精神—“道”と“遊び”と“祝い”—」の演題で発表した。



韓成俊に関する資料の展示
([韓の国 楽・歌・舞の流れ展])



李愛珠の「僧舞」(パンフレットより)

ところで、この国際会議の招聘状に「韓成俊に敬意を表し、政府公認の文化形態に基づいて国際会議を開催する」という旨があり、会議当日は氏に関する冊子も配布された。

一体、韓成俊（ハン・ソンジュン）とはどういう人なのだろうか。その「韓成俊の舞踊に関する韓国舞踊の精神」について発表したのが李愛珠教授であった。李先生は韓成俊(1874-1941)の娘・

韓英淑（1925-1969）に舞踊の薫陶を受け、師に続き四十代で僧舞の人間文化財に指定された韓国舞踊の名手。彼女によれば、韓成俊は日本の植民地時代に創氏改名を拒否し民族意識を貫き、極貧の中で生命力と生活の動きに基づく創作によって韓国の伝統舞踊に近代性・未来性を備えることを目指したという。

その発表の際に僅かではあるが、彼女が上半身だけを動かして見せたサルプリ舞の実演は“恨（ハン）”という韓民族の心が見事に凝縮されていたようであった。

さて、私の論評は国楽院芸術監督で鶴蓮花台合設舞で人間文化財に指定されている李興九氏であった。氏は私の論文から日韓の伝統舞踊の根底に流れている精神があまりにも韓国と類似点の多いのに驚いたというが、実際、私が日本舞踊の映像を紹介すると今度はそれ以上に様式の違いに驚かれていたことが懐かしく思い起こされる（日帝時代の終焉後、日韓は文化交流が断絶し日本舞踊についての公式な発表はこの時が初めてのようだった）。

このように、人と人とのつながり、アジアの舞踊の心や形、そして組織や現状等、この会議で得たものは計り知れない。その後も、金大中大統領の訪日に伴って来日された国楽院の韓明熙院長には私の勤務する日本大学芸術学部で特別講義「韓国の伝統舞踊と音楽」をお願いできたのも幸いであったし、2001年9月、教科書問題で日韓の交流が冷え切った最中に本学では国楽院より特別な許可が下り楽器と衣裳の借用ができた。そして、滞りなく「韓の国 楽・歌・舞の流れ展」を開催し、美しい宮中舞踊の衣裳と日本初として正楽の楽器や韓成俊の功績を紹介することができた。今振り返ると、伝統舞踊や音楽を通して培ってきた隣国・韓国との篤い友情の証にほかならない。



宮中舞踊「春鶯囀」の衣裳と楽器・座鼓
（「韓の国 楽・歌・舞の流れ展」）

李愛珠教授とトンジャ・ナンジトウ女史—ソウル大学校主催東北アジア舞踊国際学術会議

[2009年11月12日、於：ソウル大学校閨章閣]

国楽院の国際会議で初めてお会いした時、李愛珠先生には、言わば反日だからこそ韓国舞踊の魂が宿っているのだ、と私は直感した。そして、この素晴らしい舞踊家・李愛珠とお近づきいただけるか少し不安であったが、会食の折に日本人の私に細やかな気配りをして下さ

り、すぐ仲良しになった。

その1年半後、私が半年間、韓国芸術総合学校舞踊院で教鞭を執った折、2度程お目にかかったが、そうこうするうちに遂に2002年7月に東京で再会。日本女子体育大学で彼女を招聘し「日・韓 舞踊教育シンポジウム」を開催する計画があり、当時舞踊学会会長でいらした若松美黄先生のお取り計らいで李先生のご縁により私も参加することになった。

当日、私との再会に驚きと喜びを示された李先生の姿が思い出される。

李先生とは十年近く、このような淡々とした交際であったが、一昨年春に突然、彼女から国際会議の招聘を受けた。東北アジアの舞踊の共通点と相違点に関するテーマで私に日本舞踊について発表していただけないかという話であった。そこで私は、日本舞踊の概論として概念・起源・歴史・継承形態・技法・身体表現・動作解析について発表してきた。

李先生、実は舞踊家としては天下一品だが、実務能力には長けているとは言えないようで、国際会議当日は学生たちのイベントと重なっており、会議の準備はてんやわんや、学生たちも会議を中座するなど嵐のような一日であった。でも、学生たちのイベントでの舞踊指導を遅くに終えて、ホテルで待機している私たちに食事をもてなして下さるなど滞在中に精一杯の真心で接して下さった。その国際会議で私と一緒に招聘を受けた方が八十歳のモンゴル国立文化芸術大学教授のトンジャ・ナンジトゥ女史。NANA プロジェクトが計測した日韓の伝統舞踊のモーション・データに大きな関心を示され、モンゴルにもモーションキャプチャを用いた動作解析を啓発でき、有意義な交流となった。

この4月、私は再び、国楽院の開院 60 周年記念学術会議として開かれる「古楽譜・古舞譜国際会議」に出席することになっている。果たして、またどのような出会いが待っているか……。心躍らせて、今発表の準備に取り組んでいる。

1998 年の国際会議以降、向こうで知遇を得た多くの韓国の友人や若者が交渉（通訳）で私の訪韓を今も支えて下さっている。いっぽうでまた、そこで出会ったアジア各国の方々ともつながりができ、アジアの伝統舞踊を通して一つの輪になっていることを実感する。



向かって左から2人目からトンジャ・ナンジトゥ女史、李愛珠教授、筆者（ロッテ・ワールド民族博物館に於て）

「舞踊作品における物語の共通構造」

比較舞踊学会副会長 国枝 たか子

1. 英国ロンドンの劇場街の調査

1980年代の英国は経済的に追い詰められた時代だった。ポンド安はひどいものだった。失業者も多かった。その時代にグラスゴー大学で国際学会があり、二度～三度と渡英した。

当時の比較舞踊学会会長は本間周子先生であり、数人の研究者と共に出席した。私と本間先生は良いコンビとなって次の時代に活動することになるが、その基礎を築いた人間関係は80年代～90年代に英国研究の過程で創り出された。30歳代は、いわば本間慶大教授のふところ刀として、知恵袋としてイギリス研究をすすめていった。

マダム・オスターバーク研究も発展した。なにせ、自筆の文書を直接見ながら解説していくのだから、面白さは国内に閉じこもっている研究者の比ではない。真筆の迫力である。五感から信念や工夫がほとばしっているのだ。当時はサッチャー政権下で「鉄の女」による改革が断行されていたため、大学の三つに一つは廃校にされていた。

オスターバーク女史の大学も廃止されて、ロンドン大学の一角に吸収された。貴重な史料は図書館が継承したので、私はそれを探し当てて読んだ。こんなしつこい日本人は居なかったので、英国オリンピック委員のドナルド・アンソニーが応援してくれた。ヤドビガ女王と同じ名のポーランド人の奥様の手料理を食べながら研究を続けた。

ロンドン滞在のもう一つの目的はイーストエンドの劇場調査だった。毎夜、ミュージカルやバレエ、芝居やオペラを見た。「ジーザス・クライスト・スーパースター」は最も人気のあるロングランのものだった。半年毎に役者が入れ替わっていたが、私も感動した。

コベントガーデンのオペラハウスでは、ヌレエフのバレエも観ることができた。涙が出るような悲劇的な恋物語だった。



スロバキアのコシチェ市で
ZELEZIAR舞踊団のウルバン夫人と著者

2. プロップ ―国枝による「物語の共通構造」研究

このフィールドワーク（調査）では、ロングランされている舞踊作品において「物語の要素」が強く成否の鍵を握っていることが分かった。

フランスの思想家で後に来日するロラン・バルトは構造主義、記号論で有名だが、当時の日本人にはあまり知られていなかった。

フランス語が日本人にとって難解な外国語の一つである上に、彼の新しい発見やコンセプト

が創造的革新的なため、東大の哲学や仏文学者（丸山圭三郎、平野秀秋など）にしか理解されなかったためである。（バルトの没後、少々広がりみせるが）このバルトの協力研究者で、世界中の民話を記号論の方法で調査したプロップは、世界各地の土着の民話の中に、不思議な一致を発見した。

まったく文化交流、人的交流のない他国の地域同士にも同じようなストーリーが伝えられ、愛されているというのである。（例としては「シンデレラ」や「桃太郎」物語がある。）

さてバルトやプロップに刺激を与えた研究者群のルーツはチョムスキーである。彼の偉大な業績により、人間の脳は満十歳くらいまでに共通な言葉構造「S+V+O」すなわち統辞と、それぞれのレベルでの単語のさしかえ「範列」が、地域それぞれの言語（たとえば日本語とかドイツ語とか英語など）によって完成し、その人物の人生の「母国語」として機能することが明らかになった。

ロンドンの劇場で上演された多数の舞踊作品も、いくつかのストーリーを観客に提示する。同じ構造のストーリーでも観客の好みに合う設定にしてある。観客が待ち望んでいる信念や目標を各種の濃淡や色付けされた異なる幻想（イリュージョン）に形を変えて、イメージと驚きを呼び込みながら続けられている。「すごいなァ」という感動がある。

しかし舞踊エピソードの骨格は、プロップが発見した「物語の共通要素」（法則的ストーリー 3 種 × 2 通り）であった。

後に、これらのエピソードは脳の海馬と大脳皮質の働きにより、長期記憶として人間の思い出に蓄えられることが明らかになった。

毎年、上洛して続けている古文書研究の中でも、同じような結果が出ているから面白い。

出雲の阿國が京で成功した後、江戸に招かれて東へ下り、江戸城内で阿國一座が歌舞伎を上演した折に、絵師に記録させたという絵巻物が（本物）残されているが、このストーリーがプロップの「物語の共通構造」（これは国枝による造語の翻訳であるが）に該当する。

天災戦災により親兄弟を失った孤児が、涙ながらに身の上話を語り終えて観客の哀れをひき出すと、その観客席の後ろから屈強の武士が現れる。驚いた観客が振り返る中を舞台近くに進み出た武士の前で、実は主人公は男の子ではなく少女であり、恋らしきものが二人の間にあったが戦のために別れ別れになっていた。しかし再び会うことができた、ということで「ややこ踊り」が華やかに始まるというストーリーになっている。これが前半である。（後



サンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館で(2009年)

半はまた別のちょっといかがわしい物語が別個に展開するのだが）阿國が江戸城で上演したと伝ええられる踊りは、ぜひ黛民族舞踊団さんにも上演していただきたい気がする。

観客として、いつか観たいものなり、という感じである。

このようなわけで、英国の研究調査の後は私の関心は「世界と日本」に移った。去年は二度目の世界一周旅行を果たし、ロシア、南米、北欧、東欧、北米、アジアと舞踊における「物語の構造」のフィールドワークを続けている。各国の研究者たちとのパイプも強まったので、そろそろ東京で舞踊国際研究機関を設立する時が近づいた予感がする。



サンクトペテルブルグの
エカテリーナ宮殿で歓迎の楽隊と著者

=自然人 アイヌ= こころの歌と踊り

第18回 「セトナとマニベの物語」

アイヌ文化伝承者 四宅 豊次郎

阿寒湖を巡る観光船では遊覧ガイドが、前回載せた ～その2の物語～
を次の様につづけて案内している。

セトナとメカニの婚礼の日が近づいてきたある日、セトナとマニベは湖畔に来てこれまでの愉しかった思い出を互いに語り合っていました。後日セトナがマニベを慕っていることを知ったメカニは、嫉妬に駆られマニベを亡き者にしようと企てたのです。

マニベが一人である時を見計らって、メカニは自分の腰に差していたエムシ（刀）を抜いてマニベに襲いかかった。

身の危険を感じたマニベはそれをさけようと、メカニの振りかざした刀を取り上げるため格闘となり、誤ってメカニを刺し殺してしまったのです。

正当な防衛ではあったがマニベは人を殺した罪の念に懺悔（ざんげ）し、人知れぬうちに湖に身を投げて死んでしまいました。幼い頃から慕い仲のよかったマニベがこの世にいないとわかったセトナは生きる希望を失い、ある夜、湖上にひとり丸木船を浮かべて静かにこぎ出した。

そして、マニベがいつも吹いてくれた蘆笛（あしぶえ）を、今はセトナが思いゆくまま吹いて、やがて自分も湖へ身を投げてマニベの後を追ったのです。

セトナとマニベの永久（とわ）の愛が実を結んで、やがてマリモになったと伝えられています。

秋風の吹きすさぶ夜には、セトナとマニベの悲しくむせび泣く声が聴こえてくると言う。

静かに進みゆく観光船から四面の美しい風景を眺めながら、この物語を聴いた旅行客は、しばし感動し臉（まぶた）にその情景を思い浮かばせる。

～アイヌのマリモ伝説～

ある日、阿寒湖の神様が湖を見廻っていたとき、菱（ひし）の実（アイヌ語でペカンペ、またはペカンベという）を踏んでしまい、菱の実の棘（とげ）がチクリと神様の足に刺さってしまった。

以前から菱の実には水中に繁茂して湖を汚すので嫌っていた神様は、それ以来、菱の実を邪魔にして、他の場所へ行くようにと命じた。

菱の実たちは、何とか神様の機嫌をとって、この阿寒湖においてもらおうと哀願したが、神様は「お前たちを湖に置いておくと、湖が汚れるし、人間たちが食料にするため、お前たちを採りに湖に入って汚すから置くことはできない。」と、菱の実たちの必死の願いも無情に断ってしまった。願いを聞きいれえてもらえず、我慢に我慢してきた菱の実たちは、怒って湖畔に生えている草をむしり取って丸めて湖一面に投げ込み、みんな揃って南方の地にある塘路（とおろ）湖へ去って行った。

菱の実によって阿寒湖へ投げ込まれた草が、現在のマリモになったと伝えられている。

元来、アイヌ民族にとって実生活の糧（かて）として、殆ど役に立たないマリモを「トーラ・サンペ（湖の妖精）」とよんで、どちらかと言えば嫌がっていたのである。

アイヌのマリモ伝説は、古老たちの語りでは素朴なもので、味も素っ気もあまりない物語だが、和人の作家によればロマンチックに創作されている。

阿寒湖とマリモに関しては、堅苦しく考えてなくても大らかに理解して、アカンというアイヌ語の語源である“不変不動”の大自然の中に、独特な雰囲気漂い物語や詩、歌などが生まれても不思議ではないことだけは間違いないことであろう。

塘路湖は、私たちが住んでいる阿寒町に隣接した標茶（しべちゃ）町にある。

塘路のコタン（集落）では、昔からペカンペ（菱の実）が湖に繁茂しているので、採集し食料としていろいろ活用し、重要な糧としてきた。

だから現代でも、塘路では「ペカンペ祭り」（塘路コタンの人々はこのように発音している）を開催して、以前は阿寒湖からもウタリが多数参加して祭りを盛り上げた。

このシリーズで前から連載しているが、阿寒湖では「まりも祭り」をおこない、塘路のウタリも参加していたが、近年はお互いの交流も次第に下火になってきている。

日本全体にも言えることだが、伝統文化の継承は少子化により受け継ぐ人々も少なくなりつつある。アイヌ伝統文化も、多くのウタリ（同族）が生活している地域は別として、少人数しか移住していないところは、課題も多々ある。



阿寒湖のマリモ



釧路湿原国立公園の北部にある塘路湖（とうろこ）



国楽院舞踊団の公演「鶴・蓮花台・処容舞 合説」(写真提供:丸茂氏)

平成23年度黛民族舞踊文化財団活動予定

平成23年

6月 3日 (金) 黛民族舞踊文化財団総会

7月 2日 (土) ～7月13日 (水)

アジア民族舞踊交流会

中国雲南省大理白族自治州民族歌舞劇院訪日代表団来日

韓国創舞会 (チャンムフェ) 代表団来日

交流会日程

7月 3日 (日) 神奈川県藤沢市労働会館

7月 4日 (月) 品川区立総合文化会館「きゅりあん」

7月 7日 (木) 学習院百周年記念会館

7月 9日 (土) 群馬県太田市新田文化会館エアリスホール

平成24年 1月15日 (日) 世界舞踊祭 (赤坂区民センター) 公演に黛民族舞踊団参加

研究報告誌出版予定

舞踊文化 E. T. C. No.20発行

民族舞踊文化 No.23発行

舞踊文化 E. T. C. No.20

発行人 加戸 守行

平成23年6月3日発行

港区赤坂 3-10-3

編集人 黛民族舞踊文化財団事務局

財団法人 黛民族舞踊文化財団

電話 03-3583-3633

FAX 03-3583-3639